



平和と独立を求める民衆の「決意」を伝える  
神道ジャーナリズム誌

**本号の内容** 【主張】 沖縄は「太平洋のゴミ捨て場」ではない（木川智）  
：1 / 【連載】 アジア放浪記―歴史を掘り起こし日本を見る―36（仲村之菊）：3 / 花瑛塾 四月活動報告：4 / 【連載】 記録沖縄戦③ 軍民・日米それぞれの視点から（沖縄戦史研究会「棒兵隊」）：6 / 【連載】 葦津彦と神道ジャーナリズム 「時の流れ」を読み解く4（鎌倉佐助）：14  
／お知らせ・編集後記：20

1部 1000円  
（別途送料160円）

## 米軍普天間飛行場からの有害物資流出を許さない

# 沖縄は「太平洋のゴミ捨て場」ではない

神苑の決意 木川 智

【主張】 先月十日、沖縄県の普天間飛行場で格納庫の消火システムが作動し、発がん性が指摘されている有害物質PFOSを含む泡消火剤が放出された。泡消火剤はその後、雨水排水用の水路を通じて基地南側の市街地に流出するとともに、風にあおられ、普天間飛行場南の宜野湾市真栄原や大謝名周辺の住宅街に飛散するなどした。現場周辺には宜野湾市や沖縄防衛局、警察、報道陣などが集まり、一時騒然とした状態となった。

泡消火剤を流出させた米軍は、基地内に土のう袋を積むなどして、基地から市街地への泡消火剤の流

出を止めるための措置はしたが、市街地へ流出し、また飛散した泡消火剤の回収をしようとはしなかった。そればかりか普天間飛行場の基地司令官デイビッド・ステイル大佐は流出事件翌日の十一日、泡消火剤の除去作業がおこなわれている河川を訪れ、「雨が降れば収まるだろう」と宜野湾市職員に発言した。市街地に流出、飛散した泡消火剤の除去や回収を放棄するかのような発言であり、周辺住民はるか沖縄県民の反発を買った。

結局、市街地に流出、飛散した泡消火剤は、川に流れたものは隣接する浦添市の牧港漁港に流れつき、

海に放出される事態となった。市消防は一時回収を試みたものの、効果があがらず打ち切ったという。市街地に飛散した泡消火剤の回収も大半が手つかずとなったと見られる。後日の防衛省の発表によると、基地の外に流出した泡消火剤の量は、十四万三〇〇〇リットル、ドラム缶七一九本分だそう。

今回の泡消火剤の流出事件の問題点については、各方面から様々に指摘されているが、何よりもまず、米軍基地でPFOSを含む旧来の泡消火剤が使用され、基地周辺で高濃度のPFOSが検出されていたことはかねてより指摘されていたことであり、なぜ